

# 牛伏山通信

学校教育目標  
「やさしく つよく かしこい子」  
高崎市立多胡小学校  
〒370-2124 高崎市吉井町塩 24-3  
TEL:027-387-3217 FAX:027-387-3264  
平成 24 年 11 月 5 日(月) 第 17 号

## 義民、白田六右衛門さんに学ぶ

私は、自分を「弱い人間だな～」と思っています。自分で「これからはこうしよう!」とお正月などに決意したことも、しばらくするとなんだかんだ理由をつけてやむやみにしてしまうことがあります。また、周囲の優越的な考えや意見に左右されて、自分の考えや意見を忘れてしまうこともあります。さらには、できるだけ楽な方へ、自分が得する方へ動いていってしまうこともあります。

そんな時、「もともと人間は弱い存在なんだ。自分だけじゃない、みんなそうなんだ。」とさらに自分自身に対していい分けをしたりしてしまいます。

しかし、最近、白田六右衛門(しらた ろくえもん)さんのことを知り、大変ショックを受けました。そこで今日はその六右衛門さんのことを話します。

六右衛門さんは、今からおおよそ 350 年ほど前の江戸時代の農民です。住んでいたのは多胡地区の龍源寺のそばです。六右衛門さんは 24 歳という若さで、村の「名主」(庄屋)という重要な役職についていました。年貢米を納めるべき領主(武士)と多くの農民の間に立ち、一般の農民を束ねる役目です。多胡小学校で言えば児童会長でしょうか。

当時、日本の各地は「大干ばつ」で雨が降らず、米や野菜の多くは田畑で枯れ果ててしまいました。やっとなんとした少々の米は、領主である武士に年貢として納めなくてはなりません。どんな不作の年であろうと武士は情け容赦なく「年貢米」を取り立てます。

農民は食べるものがなく、まさに飢え死にする寸前でした。そこで六右衛門さんは大きな決断を下します。米倉に保管してあった備蓄米を、近在の農民に分け与えたのです。農民は、「助かったあ!!」と涙を流して六右衛門さんに感謝したことでしょう。

では、領主に断りなく勝手に備蓄米を分け与えた六右衛門さんはどうなるでしょう? 当時の日本では、武士が最も強く、強く、武士に逆らえば大変なことになります。そんなことは常識でした。六右衛門さんが知らないはずがありません。

領主である武士が下した裁きは「斬首刑」(ざんしゅけい)でした。つまり刀で首を斬られるのです。六右衛門さんは、龍源寺の駐車場のあたりで刑を受けました。当時そのあたりはきゅうり畑だったそうです。そこで六右衛門さんの一族は、その後から現在まで一貫してきゅうりを栽培しないとのことでした。

私はこの話を最近知りました。多胡小学校の校区内にそんなすばらしい人がいたことを知りませんでした。六右衛門さんは、米を農民たちに分け与えたとき、すでに自分がどうなるか十分に分かっていたはずなんです。

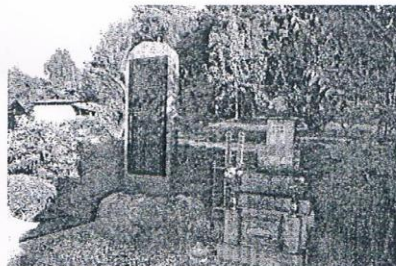
私は思います。「人のために自らの命を投げ出せる人」は、人間として最も尊いのではないのでしょうか。最近、「自分さえよければそれでよい」という風潮が蔓延しています。我々には、なかなか六右衛門さんのような偉大な人の真似はできませんが、北極星のように、常に頭上に輝き続ける星として目標にしていきたいと思えます。

さて、今日六右衛門さんのお話をしたのは、今日から「なかよし月間」が始まるからです。「自分だけよければそれでよい」という考えではなく、「みんなと助け合って、仲良くしよう」という気持ちをもってもらいたいからです。これから各クラスで「なかよし月間」にちなんだ様々な授業や行事が行われます。そんな時、「自分のことより仲間の幸せを考えた」六右衛門さんのことを思い出してくれるといいな、と思います。

(本日の朝礼から)



「六右衛門さんの墓のある龍源寺  
手前の駐車場が処刑場跡」



「六右衛門さんの墓と偉業をたたえた石碑」

## 義民、白田六右衛門さんに学ぶ

私は、自分を「弱い人間だな～」と思っています。

自分で「これからはこうしよう！」とお正月などに決意したことも、しばらくするとなんだかんだ理由をつけてうやむやにになってしまうことがあります。また、周囲の優勢な考えや意見に左右されて、自分の考えや意見を変えてしまうこともあります。さらには、できるだけ楽な方へ、自分が得する方へ動いていってしまうこともあります。

そんな時、「もともと人間は弱い存在なんだ。自分だけじゃない、みんなそうなんだ。」とさらに自分自身に対して言い訳をしたりしてしまいます。

しかし、最近、白田六右衛門（しらた ろくえもん）さんのことを知り、大変ショックを受けました。そこで今日はその六右衛門さんのことを話します。

六右衛門さんは、今からおよそ350年ほど前の江戸時代の農民です。住んでいたのは多胡地区の龍源寺のそばです。六右衛門さんは24歳という若さで、村の「名主」（庄屋）という重要な役職についていました。年貢米を納めるべき領主（武士）と多くの農民の間に立ち、一般の農民を束ねる役目です。多胡小学校で言えば児童会長でしょうか。

当時、日本の各地は「大干ばつ」で雨が降らず、米や野菜の多くは田畑で枯れ果ててしまいました。やっとなれた少しの米は、領主である武士に年貢として納めなくてはなりません。どんな不作の年であろうと武士は情け容赦なく「年貢米」を取り立てます。

農民は食べるものがなく、まさに飢え死にする寸前でした。そこで六右衛門さんは大きな決断を下します。米倉に保管してあった備蓄米を、近在の農民に分け与えたのです。農民は、「助かったあ！！」と涙を流して六右衛門に感謝したことでしょう。

では、領主に断りなく勝手に備蓄米を分け与えた六右衛門さんはどうなるでしょう？当時の日本では、武士が最も偉く、強く、武士に逆らえば大変なことになります。そんなことは常識でした。六右衛門さんが知らないはずがありません。

領主である武士が下した裁きは「斬首刑」（ざんしゅけい）でした。つまり刀で首を斬られるのです。六右衛門さんは、龍源寺の駐車場のあたりで刑をうけました。当時そのあたりはきゅうり畑だったそうです。そこで六右衛門さんの一族は、その後から現在まで一貫してきゅうりを栽培しないとのことでした。

私はこの話を最近知りました。多胡小学校の校区内にそんなすばらしい人がいたことを知りませんでした。六右衛門さんは、米を農民たちに分け与えたとき、すでに自分がどうなるか十分に分かっていたはずでした。

私は思います。「人のために自らの命を投げ出せる人」は、人間として最も尊いのではないのでしょうか。最近は、「自分さえよければそれでよい」という風潮が蔓延しています。我々には、なかなか六右衛門さんのような偉大な人の真似はできませんが、北極星のように、常に頭上に輝き続ける星として目標にしていきたいと思います。

さて、今日六右衛門さんのお話をしたのは、今日から「なかよし月間」が始まるからです。「自分だけよければそれでよい」という考えではなく、「みんなと助け合って、仲良くしよう」という気持ちをもってもらいたいからです。これから各クラスで「なかよし月間」にちなんだ様々な授業や行事が行われます。そんな時、「自分のことより仲間の幸せを考えた」六右衛門さんのことを思い出してくれるといいな、と思います。

(本日の朝礼から)